



平成30年度学校だより

善誘館 NO. 7

H30. 10. 19

甲府市立善誘館小学校 校長室



校訓 「善行・勤勉・体育」

学校教育目標

- 思いやる心をもつ子
- よく考え工夫する子
- 元気でたくましい子

行事を通して成長していく子どもたち 「すべては子どものために」

季節の移り変わりは早く、秋の涼しい風が吹き始め、今年度も折り返しを過ぎました。

2学期は運動会、校外学習、6年生の陸上記録会、児童集会のドリームランドと多くの行事がありますが、子ども達はそれらの行事を通して、目標に向かい仲間と協力してやり遂げる経験を重ねて大きく成長しております。

行事に取り組むことは、知識や技能を高め、集団としての連帯感や所属感を深め、学校と地域社会との結びつきを強める機会ともなっています。言うまでもなく学校教育は、心身のバランスの取れた健全な児童を育成することを目指しておりますが、教科の学習と連動した幾多の行事が果たす役割は大きいと感じております。保護者や地域の皆様には、これからも行事に取り組む児童への支援をお願いいたします。

親として「どのタイプの子が望ましい」ですか？

子どもを「学校と家での様子」の2つの要素で分けると、次の4つのタイプに分けることができます。

①家でも学校でも良い子 ②家では良い子、学校ではわがままな子

③家ではわがままだが、学校では良い子 ④家でも学校でもわがままな子

こういうふうに分けたとき、皆さんは、親としてわが子がどのタイプだったら、安心しますか。多くの親は、④のタイプにだけはなあってほしくないと思うことでしょう。

では、①・②・③のどのタイプが望ましい子なのでしょうか。

①のタイプであってほしいと望む親は多いことでしょう。確かに親とすると安心な子でしょうが、本当に①のタイプで問題がないのでしょうか。「いつでもどこでも良い子」。いい響きですが、どこかに無理があるような気がします。本人がまったくの自然体でできているのなら問題はないですし、すばらしいことだとは思いますが、親等の無言または有言のプレッシャーがあり、本人の意に反して①を演じているのだとしたら、いつかどこかで何らかの問題行動が生じてしまうことが多いのです。その典型的なタイプが②です。

私は、今までの経験から言って、③のタイプぐらいが一番よいのではないかと思っています。人間は、天使の心と悪魔の心を混在してもっています。悪魔の心の部分をどこかで発散できる相手や場所があってはじめて、人は精神が安定します。子どもなら、その場所が家であってほしいですし、わがママが言える相手が家族であってほしいと思います。

現実には、なかなかそういうふうにはできない場合もあるかも知れません。

その際には、地域には民生・児童委員さんがいますし、行政には児童相談所等の相談できる機関があります。学校には、担任、管理職、スクールカウンセラー等がいます。

ぜひ利用してください。人間には、愚痴や悩みを気軽に相談できる人や環境が必要なのです。



「学制解訳」～明治6年・県令藤村紫朗～

今年（2018年）は、明治元年（1868年）から満150年の年に当たります。

明治新政府により近代国民国家への第一歩を踏み出した日本は、多岐にわたる近代化への取組を行い、国の基本的な形を築き上げる明治維新を成し遂げました。教育においても大きな改革が実行され、明治5年（1872年）に、義務教育を身分や性別に関係なくすべての児童に受けさせる目的のため、学制（がくせい）が公布されました。しかし、学校の建設費や授業料の負担は地元の人に負わされたことや当時の子どもは働き手であり労働力を奪われてしまうために反発があり、実際に学校に通ったのは一部の子どものみでした。

明治6年に山梨県令（知事）となった藤村紫朗は、「人の教育も米作りと一緒にである」旨の前文で始まる「学制解訳」を県下に伝えました。そこには、山梨県民中から寄付を募り、学校建設と子どもを労働力として教育を受けさせない親への教育の重要性を説いた時代背景と言葉の節々に藤村紫朗の教育への熱意が表れています。

「学制解訳」の意識を以下に載せますので、参考にお読みください。

※甲府駅北口にある「藤村記念館」に「学制解訳」のプレートが展示されています。

百姓が田を耕して米を収穫しようとするために、まず苗代の時節を見きわめ、粃蒔きを始めるところから、稲刈りが終了するところまでのおよそ5か月の間、その丹精して苦勞することと云ったら、たやすいことではない。用水・肥料を施すことや、時々除草、また穂が出るようになったら、猪や鹿の害を防いだり、雀を追い払ったりするなど、昼も夜も気をはって手間をかけ、費用も相当にかけるものだ。このように苦勞に苦勞を重ねて、初めてよく実った米を収穫することができる。もし植えたまま放っておき、世話をしなければ、米は実ることがなく、いわゆる「しいな」になってしまう。「しいな」は一応米であるものの、これを本当の米ということはできない。

そもそも人間の教育というものも、道理は同じである。人は天から与えられた優れた性質を持っているもので、磨けば磨くほど知恵が増えるのだ。もし、生まれたままにうち捨てておき、教育しなければ、物の道理をわきまえることなく、人が人としておこなうべき事も知らない者となり、こうなってしまうえば外見は人間であっても、その実は人間とは言えないのだ。つまり手間をかけることを怠れば、米が実るはずの稲でも実りはしないということと同じ理屈なのだ。今や朝廷は天下に学制をお触れになり、村中に学ばない家は一軒もなく、また各家でも物事を知らない人が一人もいない、という状況を作り出そうとしている。これは日本国内の人民に知恵をつけさせ、身を修め、家を成り立たせ、人となすべき道を行い、各自がそれぞれの分限に応じて、平穩無事に暮らしを営むことができるように、とのお上のこのうえない仁愛であり、ありがたくない者などいるものだろうか。

しかし、世間の人はこの意図を理解せずに、子どもに生け花・煎茶・歌舞音曲など芸ごとを教え込み、真の教育をしそこなっている。あるいは、目の前の愛情に溺れて、子どもを自分の元から放そうとしない。また、教育費をかけることを嫌い、子弟が一人前となれるよう心掛けもない親もいる。こんなことで、親としての愛情がどこにあるかというのか。父兄は学制の意図を十分理解して、朝廷の憐れみ深い御心の主旨に背くことなく、よく励んで学費を稼ぎ、いつか間に合わせのような愛情は捨て、学びの段階を進めさせ、そして子どもが一人前になって一家が繁栄し、さらには子孫が幸福となるよう、県下の人民はよくよく心得ることだ。

明治6年6月 山梨県令 藤村紫朗